

平成30年3月発行

# ジモト で 保護者版 はたららく



復興庁

Reconstruction Agency

新たなステージ 復興・創生へ

## 地元で暮らし、地元で働く

地元就職するか地元以外で就職するか。

それは就職を考える時に頭を悩ませることの一つ。

実は地元には、あまりよく知られていないものの、

地元ならではの魅力的な企業がまだまだたくさんある。

そんな地元企業に就職し、実際に働いている先輩たちの

日々の仕事の様子や地元で働く魅力を紹介。

「地元就職」について考えてほしい。



## contents

地元就職へのまなざし

### まずは親が変わろう ..... 4

大泉 大介 河北新報社記者

Interview

### 地元の良さを知ろう ..... 8

石井 重成さん 釜石市 オープンシティ推進室長

鈴木 歩さん ペンシーネクストスイッチ 代表CEO

服部 正幸さん 福島大学 ふくしま未来食・農教育プログラム プロジェクト研究員

### 都会と地方の違い ..... 12

吉田 浩 東北大学大学院 経済学研究科 教授

### 被災3県の高校生・大学生の就職に関するアンケート 数字で見る3県の特徴 ..... 13

### 地元企業に目を向けよう ..... 15



地元就職へのまなざし

# まずは 親が変わろう

河北新報社  
記者 大泉大介



## 都会を甘く見るな

例年のことながら「またか…」と思う。首都圏で働き始めて間もない新社会人のフェイスブック投稿。「満員電車で体がマジ浮いた！通勤は『痛勤』って聞いてたけど、これほどとは思わなかった。涙」

「投稿読んだよ」という意味で「いいね！」を押すものの、当然本気で「いいね！」などとは思っていない。むしろ「だから言わんこっちゃない」と言いたくなる。「都会を甘く見るなって言っただじやないか！」と。

## 首都圏こそ限界集落？

河北新報社で2012年夏から、大学生のインターン（就業体験）を受け入れている。期間は1期が2週間。毎回20人前後を受け入れ、17年夏までに16期で計300人と関わってきた。インターン生たちとは就業体験終了後も交流が続く。進路選んで相談を受けることも日常茶飯事だ。

そんなつながりの中で、冒頭のような新社会人の悲鳴に触れることが少なくな

	線名	区間	時間帯	編成・本数	輸送力(人)	輸送人員(人)	混雑率(%)
1位	東京都地下鉄東西線	木場→門前仲町	7:50 ~8:50	10×27	38,448	76,474	199
2位	JR総武線(緩行)	錦糸町→両国	7:34 ~8:34	10×26	38,480	76,370	198
3位	小田急小田原線	世田谷代田→下北沢	7:46 ~8:48	9.4×29	38,347	73,816	192
4位	JR横須賀線	武蔵小杉→西大井	7:26 ~8:26	13×10	18,640	35,550	191
5位	JR中央線(快速)	中野→新宿	7:55 ~8:55	10×30	44,400	83,220	187

(表1) 東京圏における鉄道主要区間の混雑率(平成28年度) 国土交通省調べ

混雑率：100%＝定員乗車

150%＝肩が触れ合う程度

180%＝体が触れ合う

200%＝体が触れ合い、相当な圧迫感がある

※混雑率は最混雑時間帯約1時間の平均

	同一都道府県	1	2	3	4	5
岩手県	67.7	東京都 9.1	埼玉県 5.0	宮城県 3.9	神奈川県 3.8	千葉県 2.7
宮城県	77.5	東京都 5.9	神奈川県 4.0	埼玉県 2.8	千葉県 1.9	福島県 1.2
福島県	68.4	東京都 7.7	埼玉県 5.2	神奈川県 5.2	千葉県 3.0	宮城県 2.5

(表2) 出生都道府県別に見た上位現住都道府県 (%) 第8回人口移動調査 (国立社会保障・人口問題研究所調べ・2016年)

親は、子どもの夢や希望をかなえんがために働き、家事に汗する。就職先選びでも、わが子が「〇〇の仕事がしたい」「××会社に入りたい」と言えば、よほどのことがない限り「いいんじゃない!」「頑張ってる」と背中を押す。しかし、上記のような都会暮らしの嘆きに触れるたびに、親は子にもっと強く「地方に生きる」という道を説かなければと感じる。

専門家ではないので具体的なデータは持ち合わせていないが、生涯年収で見れば

### 親の後押しマイナスイ

い。通勤地獄のボヤキは誰もが通る道。月日を重ねると、「家賃が高い。貯金できなない」「東京の暑さは異常。街全体が熱を帯びて、夜になっても気温が下がらない」など、大都会の暮らしにくさ、生きにくさを嘆く投稿も多い。

全てごもっともだと思う。でも、同情する気にはなれない。「この情報社会にあって、君たちはそんなことも知らずに東京に行ったのか」と思うからだ。少子高齢化でインフラの維持さえ困難になった地方集落をさして限界集落などと表現するが、むしろ過密を極めた首都圏こそ、限界集落ではないかと本気で考える。

ば都会人が豊かで、田舎民が貧しいのだろう。ただ、生活の豊かさや人生の幸福度で測れば、必ずしも都会が勝り地方が劣る、ではないと多くの人は知っている。

東日本大震災後、被災地にボランティアに入った若者らが、そのまま移住する例が各地で相次いだ。移住に至るまでの事情はケースバイケースだから一概には言えないが、取材で出会った首都圏からの移住者の大半が、地方の暮らしやすさを語った。

### 人との関係が密な地方

通勤地獄がない、物価が安いなどの暮らし面のメリットだけではない。仕事にしても、自分が汗したことの手応えをダイレクトに感じやすいのも、人と人との関係が密な地方の魅力だという。

確かに「数」や「量」という物差しで測れば、地方の仕事の多くはスケールが小さいかもしれない。しかしその分、自分が頑張れば喜ぶ誰かの顔が思い浮かぶような確かさが、地方にはある。そんな身の丈にフィットした暮らしが震災もあって、一部の次世代の目には「本物」と映り始めている。

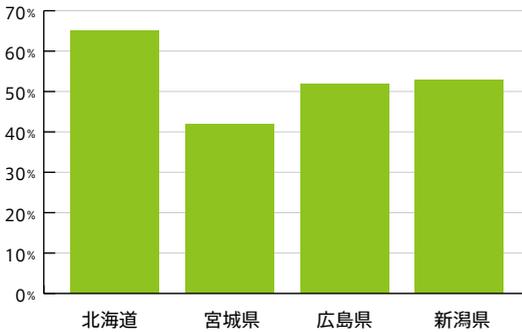
むしろ、高度経済成長を支えた祖父母

世代、バブル経済を享受した親世代こそ、「大都会の大企業に勤め、大役を務める」といった思考に毒されていないだろうか。変わらなければならぬのは、就活生たち自身ではなく、旧来型のサクセスストーリーから抜け出せない保護者層のような気がしてならない。

### 今一度自らを省みる

いま、あらためて心しなければならぬのは、「職業に貴賤なし」「住まう場所に優越なし」だ。その真理を胸に刻めば、「片田舎の中小企業で地味な仕事をする」という生き方も立派。尊敬に値する人生だ。それなのに親は子ども可愛さゆえ「寄らば大樹」が勢い余って、親自身が大企業志向、中央志向に偏ってはいないだろうか。

では、その結果苦しむのは誰なのか。親の期待通りに都会に出れば、冒頭のような息苦しさを背負う。逆に地元の中小企業に勤めようものなら、今度は「大成しなかった」と負け組扱いされる。そんな進むも地獄、退くも地獄のような人生を歩ませないためにも、まずは親自身が、地元就職という生き方を正当に評価することだ。



(図1) 平成26年3月 新規大卒者地元就職率  
各労働局報道発表・統計資料、労働局への直接聴取による



河北新報紙面

百二十年以上の歴史を持つ地方新聞社の記者としては、地元で誇りを持って堂々と働く人取材し、「おらほの紙面」で生き生きと伝えたいと思っている。



### 大泉大介 (おおいずみ・だいすけ)

河北新報社 防災・教育室主任 兼 論説委員会委員 兼 営業局営業部主任

昭和46年(1971年)大崎市長川生まれ。平成7年(1995年)河北新報社入社。報道部、特報部、大崎総局、デジタル編集室などを経て、2016年4月から現職。東日本大震災では被災直後の宮城県南三陸町の取材を担当した。12年夏から大学生向けプロジェクト「記者と駆けるインターン」を手掛ける。仙台市泉区で妻、一男一女の4人暮らし。

# 地元の良さを知ろう

地元で暮らし、働く魅力とは何か。  
震災後、被災3県にUターンした  
3人にお話をうかがいました。

*Interview*



# 「人生を自分で決められる場所」 それがふるさとであったなら とても素敵なことですよ。

釜石市 オープンシティ推進室長 石井 重成さん [愛知県西尾市出身]

いろんな人と関わり何かができる  
それが、地元に住む魅力

私は、復興支援で来た方と地元の方が交流し、多様なプロジェクトが生まれていく光景に出会いました。自分の夢を力太りに出来る可能性を秘めていて、自分が起こした事業や活動の反応を、直接感じられるちょうど良い大きさのまち。それが釜石で暮らす魅力だと思っています。

東京の生活から一番変わったことは、暮らしのストレスを感じなくなったことです。通勤時には満員電車で押し込まれ、通り歩けばどこも人が多い。そんなわずらわしさはこちらに来てからなくなりました。

雪が多いイメージの東北地方でも、三陸沿岸は雪が少なく雪かきで苦労したことはありません。夏は涼しくてエアコンいらす。四季を通して過ごしやすい場所だなと感じています。

東京には、釜石にないものや場所がたくさんありますが、「必要なときに行けば良く、暮らす場所は別にあっても良い」と思っています。三陸道など道路の整備が進み、これからますます交通の便が良くなるわけですから。

震災前は被災地でも「地元に残っても

何もできない。東京で成功するのが勝ち組」という考えが主流だったと思います。

しかし、これまで「安定的」と表現されてきた仕事や生き方が揺らぎつつある現代社会では、たとえ東京の大企業に就職したとしても、企業が生涯生活を保障してくれるとは限りません。さらに組織の中でマニュアル化された働き方をしていては個人の価値は低下するばかりです。

そこで今後は、自分の価値や役割を実感できる場所で、どう生きていくか。それを自分で判断することがますます重要になってくると感じています。その場所が、生まれ育った「ふるさと」であったなら、とても素敵なことでしょう。

釜石には、「将来は地元で働きたい」「地元で貢献したい」と恥ずかしがらずに話してくれる中高生がいます。地域でキャリアを積みむ可能性が広がっている今だからこそ、大人が多様な選択肢を背中で見せていく必要があると思っています。

東京に出て自分を試してみたい人も、地元に残って自分の軸みたくなものを見つめ直してみたい人も、自分の気持ちに正直に行動してほしいと思っています。

そして、もし釜石に住んでみたいという人がいたら、全力で応援します。それが私の役目ですから！



## 石井 重成 (いしい・かずのり)

1986年、愛知県西尾市出身。高校を卒業後に大学進学のため上京。大学卒業後、東京の経営コンサルタント会社に就職する。2012年に退職し、11月から釜石市役所職員に採用。復興支援コーディネーター「釜石支援隊」の立ち上げや「釜石市オープンシティ戦略」の策定に関わる。現在は釜石市オープンシティ推進室長を務める。

「世の中には「自分は一体何が出来るんだろう」と悩んでいる人がたくさんいて、東京にいた時の私もその一人でした」と石井さんは振り返る。釜石に住むようになり、「私を必要としてくれる仲間や場所がたくさんできた。自分が地域や社会に貢献できていてるなと強く感じています」と語ってくれた。

# 「地元で頑張る」という選択。 どんな職種であっても、 カタチにできると信じています。

ベンシーネクストスイッチ 代表CEO 鈴木 歩さん [宮城県気仙沼市出身]

当たり前だったものが宝物に  
離れてみて分かった地元の魅力

地元に戻ってみたら、中学生までは当たり前だと感じていたものが、本当はものすごく贅沢で素晴らしいことだったんだって気付きました。

お気に入りだった海辺の風景や食べ物、商品など地元にあるものの多くが、まだその魅力を外に伝えきれていない宝物でした。そして、その背景に必ず地元の人が関わっていて思いやストーリーを持っている。

たくさん物にあふれ、目まぐるしく変化するトレンドに振り回されていた東京の生活では、あまり感じる事ができなかった感覚でした。

東京では、知らない間にデザインを毎日大量に生み出すことが仕事となり、疲れてしまっただけが多かった。それでも、東京の暮らしは、消耗していたけれど幸せだと感じていたんです。

ファッション誌の仕事をしていたこともあって、常に周囲は物にあふれているので、満たされちゃうんですね。それで幸せと錯覚する。地元に戻ってそれに気付きました。

それからは、物に対する愛着心が強く

なり、物欲がすっかりなくなりました。

気仙沼のみなさんは、熱い方が多くて、生産者、経営者としての本気を私に直接ぶつけてきてくださいます。大事にしている思いやモノにまつわるストーリーを必死に受け止めながら、デザインに落としていく。本当の意味での「デザイン」による伝え方を今ここで学ばせていただいているので、とても楽しいですね。

「田舎ではデザイナーにはなれないかも」。私は、そう思っただけで地元を離れましたが、今被災地には、東京と変わらないほどいろんな方々にお会いできる環境があるし、東京などで経験を積んだ人たちが戻ってきています。

だから「地元にいるからデザインを学べない」という理由で、クリエイティブな仕事に就く夢を諦めてしまっただけなのではないかと思えます。「地元で頑張る」という選択をしても、これからは自分の行動次第でカタチにできるはずだと信じています。

震災後、地元に戻ってデザインの仕事をできるのは、どんなに悩んだり不安になったりしても、「デザイン」と関わり続けようという努力をしたということに尽きます。お子様にも、やり続ける気持ちをお子様に、大切にしてくださいね。

## 鈴木 歩 (すずき・あゆみ)

1980年、宮城県気仙沼市唐桑町生まれ。高校の美術科、芸術系大学を卒業後、デザイナーを目指して上京。2013年、地元NPOの事業に応募し気仙沼へUターン。2014年同NPO代表とともに独立しデザイン会社ベンシーを設立。2017年ごども向けデザイン教室をスタートさせ、新たなデザイン会社設立の準備を進める。



デザイナーになる夢を実現するため、高校生から地元を離れることを反対しなかった両親について、「いつも背中を押してもらっていて、本当にありがたかったです」と鈴木さんは話してくれた。「地元の慣れ親しんだコミュニティや文化も、理解を深めるほど未知のストーリーがたくさん見つかります。その驚きを感じられることも、地元で暮らす魅力の一つですね。」

# 地元で働く価値が見直され これからはもっと 活躍できる場が開かれるはず。

福島大学 ふくしま未来食・農教育プログラム プロジェクト研究員 **服部 正幸**さん [福島県二本松市出身]

**同じ志を持つ仲間や活躍のチャンス  
地元でたくさんさんの宝物が見つかる**

福島県に戻ってからこれまで、たくさん  
の地元の農家や企業の人たちと関わっ  
てきて感じたことですが、福島の人には、  
温和で優しい人が多いですね。

一方で、交流を深めていくうちに内に  
熱い思いを持っていることにも気がま  
ましました。震災後ということもあり「地元復  
興のために」という強い信念を持った人  
にたくさん出会うことができました。

また、仕事に対して真面目で、「求め  
られたことにきちんと応えてくれる」よ  
うに思います。

東京の生活から一番変わったことは、  
「暮らしと仕事の距離が縮まった」こと  
ですね。

東京にいたときは、「仕事は仕事。休  
みは休み」と切り替えていました。でも、  
福島に来てからは休みのときでも、仕事  
をしているような感覚です。ただ、その  
ことでストレスを感じることは全くなく  
て、365日仕事のことを考える事がで  
きますね。

地元の農家や企業で働いている人たち  
を見ていても自分の裁量やペースで仕事  
が出来るからなのでしょう。みなさん生

き生きとしています。

地元には知り合いが多く、スムーズに  
仕事を運びやすい、同じ志を持っている  
仲間と出会いやすいこと。これが地元で  
働く魅力だと思います。

これまでも強みだった農業のブランド  
化、医療など新しい産業への期待。福島  
には未開拓部分が多くて起業のチャン  
スがたくさん眠っていると思っています。  
昔は東京に出ていかないとできな  
かったことも、地元発信で全国的な活躍  
できることはたくさんあります。

これからは働き方がもっと多様にな  
り、地元で働く価値や意味も見直されて  
いくと思っています。ですから、自分の  
考えや行動しだいで地方に住んでいても  
活躍の道が開かれていくはずですよ。

私は若い頃は、自分らしく生きるため  
にもっと突っ走ってもいいのかなって  
思っています。そのアクションが、自分  
のルーツである地元でやれるのならいい  
ですよ。年齢や経験を重ねるたびに新  
しい再発見もあるし、さらに自分を磨く  
こともできるでしょう。

私は、福島県で頑張る方々を応援しな  
がら充実した毎日を送っています。地元  
で活躍したいと思ってお子様たちと  
出合い、力になれたらうれしいです！

## 服部 正幸 (はっとり・まさゆき)

1986年、福島県二本松市出身。長岡造  
形大学(新潟県)在学中に新潟県中越地  
震(2004年・M6.8)と新潟県中越沖地  
震(2007年・M6.8)を経験する。卒業  
後は新潟市内や東京都内の民間企業に勤  
務。2011年、財団法人(現・公益財団法人)  
山の暮らし再生機構(新潟県)、2012年、  
認定NPO法人ふるさと回帰支援センター  
(福島県担当)を経て、2013年から現職。



「浜通り・中通り・会津で気候風土や文化風習が  
違いバラエティー豊かなところも魅力の一つ」  
と話す服部正幸さん。「今後もさまざまな地域を  
訪れ、地域資源、特に歴史・文化の有効活用方  
法を探っていきたいと妄想しています」。

# 都会と地方の違い

東北大学大学院 経済学研究科 教授

吉田 浩



都会と地方の違いについて、一概に優劣をつけられるものではありませんが、さまざまな調査結果の数字から地域ごとの特性を見ることは可能です。

例えば、平成27年に行われた国勢調査（総務省の結果を見ると、生活に欠かせない衣・食・住の「住まい」についてみただけでも、持ち家比率については、東北では全国2位の秋田県78・0%を筆頭に、岩手県が68・7%、福島県が66・1%、宮城県が58・8%と、東北地方は全般的に持ち家比率が高くなっています。ちなみに東京都が47・7%と半数以下であることを考えると、かなり高い比率といえるかもしれません。

また、「働く」ということを考えた場合、雇用者総数に対する正規職員・従業員の比率、いわゆる正規雇用者比率も、山形県の70・8%を筆頭に、福島県が68・7%、岩手県が67・3%、宮城県が66・3%と、東北地方では正規雇用者比率が高くなっています。

このように、一つひとつの項目を見ていくと、ほかの都道府県と比べて、岩手県と福島県は「食料自給率」が高かったり、宮城県は「事業所新設率」が高かったりと、それぞれ特徴があるのです。

そこで一つの目安となるのが、現在の暮らしに対する満足度です。

平成29年に内閣府が行った「国民生活に関する世論調査」の、現在の生活に対する満足度調査から、「所得収入」、「食生活」、「住生活」、「現在の生活」の満足度を、東北地方、北関東、南関東の地域で比較してみました。その結果、東北地方は「所得収入」に対する満足度は低いものの、「食生活」、「住生活」において満足度が高くなっています。（表1）

東北地方は関東圏よりも食生活に対する満足度が高く、先述の持ち家率も高く、住生活にも満足している人が多いようです。

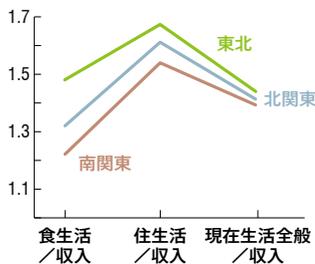
一方、現在の生活についての満足度は南関東が高くなっていますが、「所得収入」の満足度を基準として「食生活」、「住生活」、「現在の生活」の満足度を比較すると、実は東北地方は現在の生活に対する満足度も高くなるのです。（グラフ1）

現在は新幹線や高速道路が整備され、例えば仙台から東京までは新幹線で約1時間半と日帰り圏内です。首都圏へのアクセスの利便性も高く、豊かな自然に囲まれて、新鮮な食材が関東圏より安く購入でき、関東圏よりは広い家に住めるということを考えて、東北で働き、東北で暮らすという選択肢も「まんざらではない」のではないのでしょうか。

	a	b	c	d	e	b/a	c/a	e/a
	所得収入	食生活	住生活	レジャー 余暇生活	現在生活	食生活 ／収入	住生活 ／収入	現在生活 全般 ／収入
北海道	46.1	24.0	84.1	59.4	70.8	1.302	1.824	1.536
東北	49.7	29.5	82.6	58.0	70.9	1.484	1.662	1.427
北関東	49.7	26.3	81.1	61.3	70.3	1.323	1.632	1.414
南関東	53.5	26.0	82.5	65.9	75.0	1.215	1.542	1.402

（表1）国民生活に関する世論調査（内閣府調査）「満足・まあ満足」と答えた人の比率

調査対象： 全国の日本国籍を有する18歳以上の者10,000人  
有効回収数6,319人（回収率63.2%）  
調査期間： 平成29年6月15日～7月2日



（グラフ1）

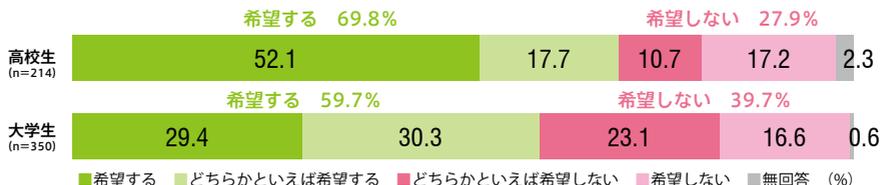
# 被災3県の高校生・大学生の就職に関するアンケート

平成29年12月に岩手・宮城・福島の高中生（水産系を中心）・大学生に対して、就職に関するアンケートを行いました。3県の学生の地元就職に対する考え方を見てみましょう。

※被災3県高校生214名・大学生350名の回答から（2017.12 被災地における高校生・大学生・保護者の就職に関する調査）

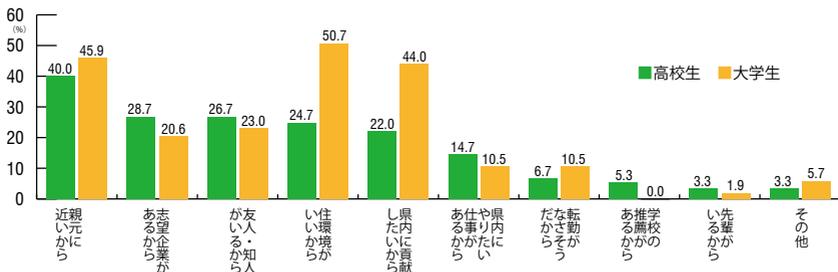
## ■ 県内への就職希望について

県内への就職希望者は、「希望する」「どちらかといえば希望する」と回答した「希望する」学生が、高校生では約7割、大学生では約6割と、いずれも半数以上が県内就職を希望しています。



## ■ 県内就職を希望する理由

県内への就職希望理由は、高校生が「親元に近いから」が最も多く、大学生では「住環境がいいから」「親元に近いから」「県内に貢献したいから」などとなっています。



## 数字で見る3県の特徴

首都圏と東北各地の違いは、暮らしにかかわるさまざまな数字からも見る事ができます。国が行ったさまざまな調査結果から都会と地方の違いを見てみましょう。

### 通勤手段

通勤方法は、東京都では鉄道・電車の利用が最も多く、東北地方は山形県の1位を筆頭に、自家用車で通勤・通学している人が多いのが特徴です。

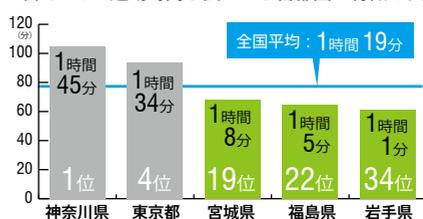
通勤・通学で自家用車だけの利用割合



※平成22年国勢調査より

### 通勤時間

1位の神奈川県に続いてるのが埼玉県、千葉県と、1日あたりの通勤時間が長いのが首都圏の特徴です。

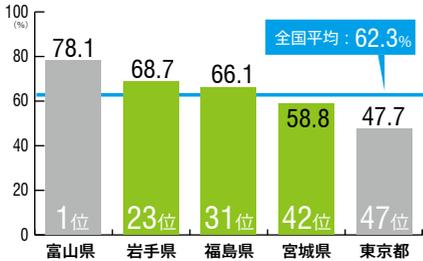


※1日あたりの通勤・通学時間(10歳以上の「通勤・通学」をしている人、平日の平均)平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

## 住まいについて

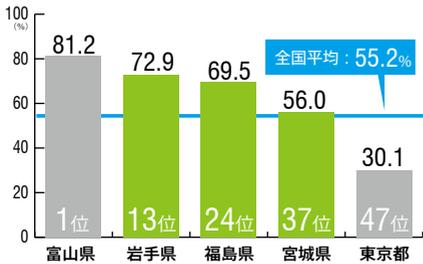
東北地方は、持ち家の比率が高く、岩手県、福島県では全国平均を上回っています。そのうち、一戸建ての住まいに住んでいる人が多いのも特徴です。

### 持ち家比率



※平成27年国勢調査

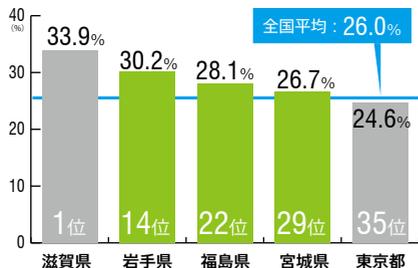
### 持ち家のうち一戸建ての割合



※平成27年国勢調査

## ボランティア

東日本大震災を経験しているだけに、ボランティア活動に熱心なのも東北地方の特徴で、岩手県・宮城県・福島県ともに全国平均を上回っています。



※過去1年間にボランティア活動をした人の割合(10歳以上)  
平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

## 帰宅時間

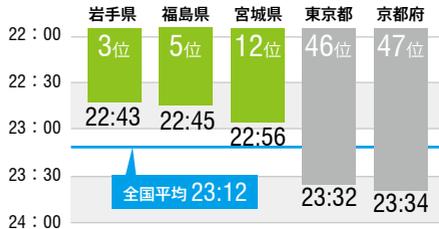
東京都では、通勤時間や就業後に立ち寄るスポットが多いせいか、帰宅時間は19:13と、遅くなっています。



※有業者の平日における平均帰宅時刻  
平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

## 就寝時間

東京都の平均就寝時刻は全国平均よりも遅く、岩手県、福島県では、全国平均よりも早寝の人が多ようです。



※10歳以上の男女の平日における平均就寝時刻  
平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

## 睡眠時間

一日の睡眠時間の長さは、秋田県の1位を筆頭に、岩手県・宮城県・福島県ともに全国平均を上回っています。大都市圏に比べてゆっくり寝ているようです。



※1日あたりの睡眠時間(10歳以上、土日を含む週全体の平均)  
平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

## 地元企業に目を向けよう

企業のさまざまな情報は、大手就職サイトなどで見ることができる。一方、企業を選ぶ学生も、そうした就職サイトに名を連ねる大手企業や首都圏企業に注目しがち。

しかし、そのようなサイトに掲載されていなくとも、仕事の魅力はもちろん、職場環境の改善や地域密着、社会貢献など、さまざまな取り組みを行っている多くの魅力的な企業が、地元にもたくさんある。一方でそうした地元の企業は、あまり学生に知られることなく、人材の確保に悩んでいる。

豊かな自然に囲まれて、これまでの住み慣れた環境で、家族と共に暮らしながら地元の魅力的な企業で働くことも選択肢の一つ。

まずは、地元企業に目を向けてみよう。

問い合わせ先

---

**復興庁企業連携推進室**

TEL 03-6328-0267

mail [kigyo-rs@cas.go.jp](mailto:kigyo-rs@cas.go.jp)

---

ジモト  
で 保護者版  
はたらく